

算命学中庸

【初年】 22回目

22回目の授業はこのページからです。

授業科目 【鬼谷子】

【初年】 22回目 【鬼谷子】 01

算命学の源は約 2,300 年ほど前に「鬼谷子」という人物
によって、集大成されたといわれています。

鬼谷子の年齢は不明なのですが、時代背景は儒教の祖・
孔子とほぼ同時代で、孔子より少し若い世代といわれて
います。

儒教はおよそ二千数百年前に体系化されたそうですが、
孔子は弟子達にいろいろ説いています。

〔たとえば〕 その教えの一つに、

親を大切にしなさい



儒教の教え

「親を大切に^{うやま}して敬う」弟子に、親を敬って大切に
しなさい、と教えたわけです。

〔たとえば〕 「孝は百孝の本 こうはひゃっこうのもと」と説いています
ように、儒学の基本は「孝」にあります。

〔たとえば〕 父親が他界して3年間は喪に服し、全財産を投じて
も『孝』に報いなければならない。

〔たとえば〕 父・母に仕えるときは、親の気持ちに^{さわ}障らないよう
にものをいい、親が聞き入れなくても、尊敬の念を失ってはいけ
ない。儒教の孝行です。どうですか——？

〔たとえば〕 親孝行は絶対的服従であるから、息子が嫁を父親に
寝取られても、父親の気持ちに^{さわ}障らないように、ゆるやかに^{いさ}諫め
る。父が行いを改めなくても、子は我慢しなければならない。

儒教の孝行です。どうでしょう——？

孔子は「中庸^{ちゅうよう}」を説いていますけど、当て嵌まるのでしょうか……？

「孝行」とまったく異なるでしょうが——。

昨今の不倫炎上でいえば、[夫が浮気をして、妻は夫の気に障らないように、遠回しにやんわりと諫めて、夫が聞き入れなくても、妻は我慢しなければならない]となれば、世の妻はいかなる心境になるでしょう。

孔子は『孝』^{こう}を説きましたが、その中身は凄まじいものです。

「二十四孝」^{にじゅうしこう}には、儒教の考えを重んじて、24人の親孝行の話が書かれています。ネットで検索するとよいでしょう。

そのなかの『郭巨 かくきょ』——家族は貧しく、郭巨は母と妻を養い、郭巨に子供が生まれた。郭巨の母は孫を可愛がり、自分の少ない食事を孫に分け与えていた。

郭巨は妻にいう。貧しいために孫に分けていたのでは、母が死んでしまう。子供はまた授かることができるが、母を授かることはできない。ここは子を埋めて母を養おう。妻は悲嘆に暮れたが、夫の命に従い、3歳の子を連れて埋めに行く。郭巨が涙を流しながら穴を掘ると宝物が出てきた。というハッピーエンドな帰結になっていますけど——そこには、子供を殺しても、親孝行という悲惨が存在します。

⇒ 「易牙 えきが」について、ご存じの方も多いとおもいます。

易牙は戦国春秋時代、齊（現在の山東省北部）の桓公に仕えた料理人です。

桓公は「天下の美食は味わったが、人肉は食したことがない」と、易牙にいうと、易牙は出世の機会とおもい、自分の息子を殺して、〔肉を蒸した〕とも〔スープにした〕ともいわれていますが、桓公の食卓に供したところ、「これほどの美味を食したことがない。なんの肉だ？」と、桓公は易牙に訊ねました。

易牙は息子の肉であることを告げましたところ、桓公はますます易牙を気に入ったとのことです。ネットにいろいろ書かれています。

⇒ 中国では人肉が病気に効能があるとされ、親に自分の肉を食べさせる（自分の腿の肉を切り取って）ことは、親孝行の証だとして表彰され、いろいろな特典が一族に与えられたそうです。

参考図書〔儒教の毒〕PHP 研究所

先ほどちらっと書きましたが——孔子は「中庸」について述べています。孔子は「中庸」は“徳として極まるもの”（極端にならないことは、最高の徳である）と説きます。ところが、儒者は相手を言い負かす事が主眼で、相手を論破できるか否かです。

中庸は“徳として極まるもの”（極端にならないことは、最高の徳である）といったわけです。しかし、孔子が説いた「親孝行」の在り方——皆様にはどのようにおもわれますか？

ちゅうよう
中庸〔日本国語大辞典〕どちらにも片寄らないで常に変わらないこと。過不足がなく調和がとれていること。また、そのさま。
中正（ちゅうせい）。中道（ちゅうどう）。

お釈迦様は「中道^{ちゅうどう}＝中庸」を説いています。

実際の生活のなかで生かす理^{ことわり}であるとしています。

「実践しなさい」しなければ空論にすぎないといっています。

その意味合いは、中庸^{ちゅうよう}〔日本国語大辞典〕とおなじです。

おなじ「中庸」であっても、そこにはまったく異なる中正^{ちゅうせい}の道が存在していると感じられます。

「孔子の説く中庸」「釈迦の説く中庸」皆様のご判断です。

儒教には「礼＝礼節」も説かれているそうですが、日本にはその部分が欠落して伝えられている。と書いてある本もありました。もし、そうであれば、もったいないことでしょう。

☞ 鬼谷子にもどります。

孔子は「親を大切に^{うやま}して敬う」と説いています。
親を大切にしないと弟子に教えたわけです。

鬼谷子は——それに対して「親を大切にしないと
考え方は、確かに立派な教えかも知れないが、親を大切
にしたらどうなるのか……？」という考え方をしたそう
です。

鬼谷子 ⇒ 親を大切にしたらどうなるのか

〔親を大切にしたら、その人は幸せになれるのか……〕

〔親を大切にすれば、幸せな結婚が出来るのか……〕

〔親を大切にすると、世の中で成功できるのか……〕

鬼谷子は「親を大切に^{する}役目の人もいるはずだ」しか
し、「親を大切に^{して}はいけない役目の人もいるはずだ」
「それは人によって違うのだ」と考えたわけです。

親に反発して、親元から離れて、親ができなかったこと
をやり^と遂げる。そういう人も、世の中には必要なのでは
ないか。そういう考え方をしたといわれています。

実際に――両親を大切にしてい、いい息子で、いい娘で、親の面倒を一生懸命に看て、親孝行をして、それで自分の人生を犠牲にしている人も、世の中にはおられます。

親の面倒を一所懸命に看ているから、いつまで経^たっても結婚できない。ということもあるでしょう。

親に反発して勘当されたけど、そのことがきっかけで、幸せになれた人もいるはずです。

ひとりひとり、人間のもっている資質も個性も違うわけですから〔親を大切にしたらどのようになるのか……〕このことは一人ずつ違うはずである。
というのが鬼谷子の考え方です。

「子は親を大切にしなさい」と教えるのなら、〔親を大切にしなかったらどうなるのか……〕そこまで教示^{きょうじ}しなければ意味がない。

といったそうです。

☞ 鬼谷子は「すべての結果には原因がある」と考えています。

すべての結果には原因がある

「親を大切にすべき宿命の人もおられます」

このような場合も、親と本人の宿命を照らし合わせて観ないと、はっきりしたこたえはでてきません。

つまり、親の宿命と子供の宿命は違うのです。

親子であっても、生命体は別なのです。

「親を大切にしないほうが、宿命が生きる・生きてくる」

そういう宿命もあります。

端的に言えば、子供が親と縁がないのです。

親からみて、親の役に立たない宿命の子供といえます。

そういう子供は「親との縁^{えにし}をうすくした生き方をしたほうが、子供の運勢にとってはよいですね」という宿命になります。

“親を大切にしてはいけません”と、書いてある宿命であるのに、親を大切にすれば、その子供は自分の宿命からはずれた人生になって行きます。

だからといって、親のほうは、その子供と縁が深いという
ことでもあります。ではどうしたら良いのか……。

算命学をまなぶと理解できます。

〔たとえば〕 親からみて、生れた子供たち全部が親孝行
で、競い合うようにして、親の面倒を看ようとしたら、
親のほうも困ってしまうのではありませんか……？

跡継ぎということでは、親の跡を継いでくれる子供
は、一人いればよいはずで。

ほかの子は、親元から離れて自立してくれないと、親も
困るはずで。

いつまでも、子供たちが、親のそばから、離れようと
しなければ親は大変です。

〔親離れできない子供〕〔子離れができない親〕 この両者
はどちらも大変です。

それらの全てが、一人の人物の宿命に書いてありますよ。

とはいえませんが。そのようなときは、両親の宿命などを
交えて観ることになります。

算命学は集団の占いです。

このように——実にさまざまな宿命があるという事実を知っておいていただきたいのです。

〔たとえば〕 鑑定でも、よく……。



長男は順調に育ちました、でも次男がチョット問題児になってしまいました。

そういうご相談で鑑定に来られる方もおられます。

「長男は順調に育ちました。次男もおなじ育て方をしていたのに、次男は問題児になってしまった」このようにおっしゃるわけです。

おそらく、その人の胸中には、長男はこういう育て方をしてうまくいったので、次男も差別することなく平等におなじようにという意識だったのでしょう。

長男に買ってあげたら、次男にも買ってあげて、長男を

塾に行かせたから、次男にも塾に行かせて——おなじように、おなじ食事をさせて、私は差別なく公平に育てました。だから私の育て方は間違っていないわ。

そういう意志が内在されている場合もあるわけです。

しかし算命学的に考えれば——長男と次男では宿命が違います。宿命が違うということは、おなじ兄弟であっても役目も、個性も違うわけですから、おなじ育て方をすれば、差がついて当たり前なのです。

親の育て方に合った子供は伸びるでしょうが、合わない子供は伸びなくて当たり前です。

子供は兄弟であっても、おなじように平等に育てるのではなくて、個々の宿命に合った育て方をすることが肝要です。

〔たとえば〕長男は大事にして、次男はほったらかしにして育てたほうが良い場合もあるのです。

おなじ兄弟であっても、実際にそういう宿命も多いです。

算命学は、一般の子育てとは大きく異なるところです。

これも一般論ですけど、宗教の場合であれば、全ての人におなじことを示教^{しきょう}して、信仰心を教導^{きょうどう}することが多いでしょう。

こういう生き方が正しい生き方で、こういうことを大切にしない。というようにです。

その教えに当て嵌まる人もいるでしょうし、当て嵌まらない人もいるはずです。

そこでいえるのは、宗教の場合は、おなじような考え方、おなじ求道者の集りなのです。

——さきほどの話の続きで〔長男が順調に育って、次男がちょっと問題児になったとすれば——〕そこには必ず原因があるはずだ。鬼谷子はそのように考えたわけです。

これは因果法則（因果律）とおなじで〔一切のものは原因があって生起^{せいき}し、原因がなくては何ものも生じない〕とする考え方です。

どんな結果であつても“たまたまそうなった”ということはない。偶然そうなったということもない。

必ず原因があつて、そういう結果を招いている。

鬼谷子はそのように考えたわけです。

このことについては、イエス・キリストも、お釈迦様もおなじことを説いています。

『すべての結果には原因がある』鬼谷子もおなじように考えたわけです。

〔たとえば〕道を歩いていたら、たまたま、上から物が落ちてきて、それが当たって死んでしまった、実際にそのような事がありますよね。

たまたま道を歩いている、たまたま、上から物が落ちてきて、たまたま当たって死んでしまった。

たまたま偶然で死んだ。

それは有り得ないのです。

“あの事故で死んでしまった” そのことに焦点を絞ると
“たまたま運が悪かった” と映るかもしれませんが、
そうなるには、必ず、そうなる原因があるのです。

算命学では“その人は死を招くような生き方をして来たから、物が落ちてくるような所を歩いた” というふうに考えています。

⇒ 宇宙規模の自然の^{ことわり}理でいえば、その人が生来もっているカルマと密接な^{れんかん}連関があるのです。

「^{なんじ}汝^まら^か蒔くごとく刈りとらん」自分で蒔いた種は自分で刈り取るのが自然の理法です。

スイカの種を蒔けばスイカが実り、^{けし}芥子の種を蒔けば、未熟な果実の乳液から麻薬の原料を抽出できます。

悪い種を蒔けば、蒔いた人自身が刈り取らなければなりません。

自然の理法に反する行動を歩めば、それに比例した^{あがな}贖いをしなければなりません。

算命学でいえば〔因縁の消化〕というふうになるでしょう。

——たまたま乗った飛行機が、たまたま墜落しました。

でも搭乗する発着便が、1機ずれていたら助かったという人もいるのです。

たまたま、彼があの飛行機に乗ったのは運が悪かった。

と世間では思うでしょうけど、〔たまたま落ちる飛行機に乗ってしまう〕ということはないのです。

落ちた事実だけを見ると、たまたまそうなったように、想えるかも知れませんが、落ちる飛行機に乗る直前まで、

その人の何十年かの人生があったわけです。

その生き方の過程において——その人が死ななければならぬ原因が作られているはずなのです。

占いをするときには、このような考え方を納めておいて、宿命を観るようになさるとよいでしょう。

カルマ〔業〕 広辞苑〔行為・行動など、善悪の行為は因果の道理によって後に必ずその結果を生む果報。果報〔因果応報。前世の行いのむくい〕

人間のカルマは どうして生じたのか——想念が生みだしたものです。

〔たとえば〕 金は絶対で命のつぎに大事なもの——。

地位が高ければ尊敬される——。

……なにかへの非常に強烈な念が生みだすのです。

カルマは渦のように、ぐるぐるとまわり続ける質を有し、その渦に巻き込まれてしまうと抜け出せなくなります。

【初年】 22回目【鬼谷子】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 23回目【少子化について】